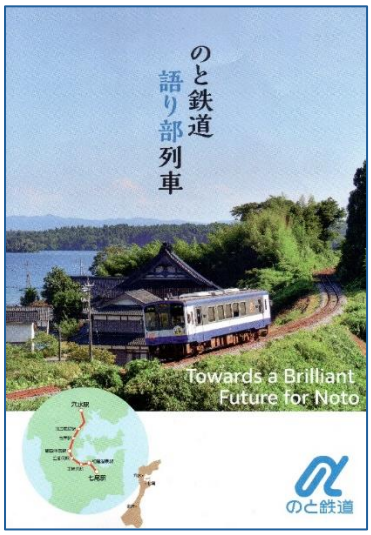
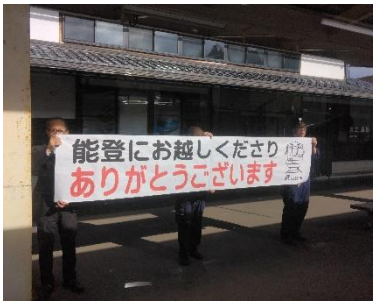


語り部列車に乗ってきました



楠地区の民生委員の研修で、令和６年１１月１８日に、能登半島地震の語り部さんから直接話が聞ける特別列車に乗ってきました。

のと鉄道の貸し切り車両１台（通常の列車に増結）に乗って、始発の穴水駅から終点の七尾駅までの間、語り部さんから、地震発生時や津波から逃げたときの様子、復興の現状などを聞かせてもらいました。

穴水駅を出発するときには、ホームに駅員さんたちが横断幕を持って見送っていただきました。『能登にお越しくださり　ありがとうございます』と書かれた横断幕を見て、「能登の被害の状況、復興の現状を知ってほしい」「支援をありがとう」という気持ちが込められていると感じました。

また、語り部さんについて、先入観でイメージをつくっていたことを反省しました。語り部さんといえば、年配の方々と思い込んでいましたが、能登半島地震は今年の１月１日のことですから、小さな子どもからお年寄りまでが地震の経験者で語り部さんだということです。列車内で話を聞かせていただいたのは、若い二人の女性でした。このお二人は、のと鉄道の社員さんです。

震災が起こった時は、列車に乗って県外からのお客さんを案内しておられました。その途中で地震が起こったということです。

私たちの列車の走行中、語り部さんが、「あちらに見える坂道を、お客さんたちと一緒に懸命に上りました」と話し始め、津波から逃げるために高台に避難した様子、高台の建物に着いたけど、鍵がなくてすぐには入れなかったこと、地域の人たちの協力も得てなんとか夜を過ごしたことなどを話していただきました。

パンフレットから転載した右の写真にあるように、能登地方全体に被災した家、道路などが復旧できないまま残っています。

私たちは、のと鉄道の穴水駅までバスで移動しました。途中の道路は通行できましたが、路面がデコボコで座席から飛び跳ねるような状態が長く続きました。

語り部列車の車窓からも、ペシャンコにつぶれたまま残されている家、ブルーシートで雨漏りを防いでいる家などが見えました。１０ヶ月以上の時が経ってもこの状態です。

列車から見えた被災した家屋

語り部さんの、「私たちが一緒に避難した県外からのお客さんは、全員無事に地元に帰って頂きました」、「避難に必要なものは体力です」という言葉と、「私はいま、この３つを常に携帯しています」と言って見せてくれた「タブレット菓子」、「ホイッスル」、「ライト」が印象に残りました。

このように復旧・復興に頑張っている能登地方の方々を、これからも支援しなくてはいけない。

私たち自身も、防災への心構えをしっかりとしたものにすること、具体的な備えを着実にすすめること、民生委員の活動の中でも具体化することが大切であると、改めて思います。